慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	〈言〉をめぐる物語 : 幸田露伴「平将門」論
Sub Title	A story of "words" : a study of Koda Rohan's "Taira-no-Masakado"
Author	西川, 貴子(Nishikawa, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2015
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.109, No.1 (2015. 12) ,p.148- 164
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	藤原茂樹教授 松村友視教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01090001-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈言（ことば）〉をめぐる物語

――幸田露伴「平将門」論

西川　貴子

はじめに

幸田露伴「平将門」（『改造』大9・4）は、露伴を彷彿とさせる博覧強記の語り手が、『将門記』をはじめとする多様な史料を提示しながら、自分なりの解釈を加えるというスタイルを取る。『頼朝』（明治41・9・21、東亜堂書房）に次いで書かれた露伴の史伝物の一つとされる作品だ。この作品は、同時代において歴史家達から関心を寄せられ、その後も『将門記』を解釈する上で引き合いに出されるなど、史料調査が充実している点が評価されてきた。[*1] しかし露伴自身は、「妄りに捏空搗鬼の言を為すを欲せず、筆を騙り墨を使ふや、皆依拠するところ有り、たゞ其材料を考覈するに於て厳密足らざる有る」「閑人放談の書」（「引」『蒲生氏郷　平将門』大14・12・15、改造社）と述べ、「伝記家」や「歴史家」とは異なった立場で書いた作品であると自負していた。歴史叙述と距離を取りながら、史料に基づき歴史上の人物について饒舌に語るという方法は、露伴の他の史伝物にも共通する特徴を有している。こうした露伴の史伝物における方法に関しては既に先行研究でも充実した論が展開されており、本稿でも異論はない。[*2] しかし「平将門」冒頭における次のような発言は、歴史叙述と距

離を取り、史料解釈の真偽を躱すための身振りとしてだけ捉えていては不十分だろう。

千鍾の酒も少く、一句の言も多いといふことがある。受授が情を異にし啐啄が機に違へば、何も彼もおもしろく無くつて、其れも是もまづいことになる。だから大抵の事は黙つてゐるに越したことは無い、大抵の文は書かぬが優つてゐる。また大抵の事は聴かぬがよい、大抵の書は読まぬがよい。（略）酒を飲んで酒に飲まれるといふことを何処かの小父さんに教へられたことがあるが、書を読んで書に読まれるなどは、酒に飲まれたよりも詰らない話だ。（略）どうも大抵の書は読まぬがよい、大抵の文は書かぬがよい。

ここでは、「書」すなわち〈言（ことば）〉とは「酒」のようなものであり、どちらにも人を酔わせる力があることが言及されている。この「書」と「酒」の関係については、その後も作品内でしばしば触れられるのだが、しかし「書」と「酒」をめぐる話と平将門にまつわる話とは、いったいどのように関わるのだろうか。本稿では、従来より、史伝物の一つとして取り上げられるか、もしくは史料に忠実に書かれた近代作家の将門に関する作品という評価に終始してきた感がある[*3]、この作品を分析することで、露伴がこの時期、将門について語ることにどのような意味があったのかということについて考えてみたい。

1　従来の将門の捉えられ方

露伴「平将門」の分析に入る前に、まず典拠となる史料の確認と作品発表時に至るまでの将門像について簡単に整理しておこう。「平将門」では、『将門記』の記事をベースに、他の関連史料が参照されている。『将門記』を基にして将門像に迫るという方法は、明治以降の将門研究において一般的な方法であった。また、作品内で直接名前が挙げられている史料は『将門記』の他にも『大日本史』『（桓武）平氏系図』『千葉系図』『相馬系図』『日本外史』『延喜式』『神皇正統記』『扶桑略記』『日本紀略』『今昔物語』『古事談』『大鏡』『吾妻鏡』『源平盛衰記』『元亨釈書』『本朝世紀』幸若舞「信田」『平将門故蹟考』「兵部省諸国馬牛牧式」（『下総国旧事考』）「平将門始末」（『下総国旧事考』）など多数あるが、これらも将門研究においては、度々参照される史料であり、珍しいものではない。ただし、特に注意したいのは、清宮秀堅『下総国旧事考』（弘

化2刊、明38・2再刊）内の「平将門始末」（以下「始末」）の扱いである。「始末」は、作品内でもたびたび引き合いに出され批判検討されている。「始末」では『将門記』に登場する二人の「真樹」が同一人物だと解釈され、さらに「他田（オサタ）真樹」を「佗（わびた）田真樹」と誤って記しているのだが、「平将門」もこれをそのまま踏襲している。さらに「始末」で付されている注と同様の解説が作品内でも見られる点から、『将門記』を解釈するにあたって、露伴は「始末」に依拠したところが多いと推測できる。また、同じく作品内で何度も名前が挙げられる書に織田完之『平将門故蹟考』（以下『故蹟考』。明40・6、碑文協会）がある。将門の母の祖先（犬養浄人）の記述や将門拠有の地に関する解説などが『故蹟考』と重なることから、この書も露伴の『将門記』読解の一助となっていることがわかる。このように、露伴は、将門を逆賊と捉える「始末」と、英雄と讃える『故蹟考』という、二つの相異なる立場の史料をバランス良く参照しているのである。なお、典拠とした『将門記』に関しては、原文の漢文を露伴が書き下して引用する際、解釈を加えて改訂を施しているため、完全に一致するものは管見の限り見つけることができなかったが、大須本系統の『将門記』を参照していると思われる。したがって、本稿では当時最も普及していた『群書類従』所収の活字版（明27・5・4、経済雑誌社）を底本とし、適宜、幸田成友（現在、慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵）や内閣文庫が所蔵していた寛政一一年版本、並びに大須本と別系統の内閣文庫本『将門記略』、内閣文庫本『将門記抜書』などの諸本を参照して引用した。[*4]

次に、将門像について考えていきたい。周知の通り、明治時代以前から、将門は『神皇正統記』や『大日本史』（「叛臣伝」）をはじめ多くの書で「窺窬之心有り」として、逆賊と捉えられてきた。特にこうした逆賊・将門像は説話や芸能の世界では、死後、首が飛ぶという怪異を起こしたり、妖術を使い七人の影武者を操ったりするなど、人間離れしたものとして伝説化され、御霊信仰の対象にもなっている。このような逆賊・将門像は、明治初期から大正九年に至る歴史科の教科書でも受け継がれるなど、根強く残っていたのである。[*5]

しかし、その一方で、明治二十年代頃から『将門記』を基に、将門の乱の真相解明の研究が進められていく。[*6]これらの研究では、将門の存在は、地方政治が乱れ、武士が台頭した当時の状況を示す好例で、藤原純友や安倍頼時の乱、後の源頼朝

の蜂起などと性質上変わらないものとして捉えられた。また、貴族政治を打破しようとした「革命者」とする論も出現し、[*7]さらに明治三八年、大須宝生院真福寺蔵の『将門記』（大須本）が国宝に認定されると、『故蹟考』の著者・織田完之が、将門を正当防衛し続けた悲劇の義士と捉えて冤罪運動を起こすなど、新たな将門像が提示されるのである。

このように、「平将門」が発表された大正九年段階では、教科書にも受け継がれた「逆賊」というイメージが依然として残る一方で、それとは反対に、悲劇の英雄、また、武士の台頭という社会変動を表す存在という、主に三通りの形で将門は捉えられていたのである。

2　「平将門」における将門像

露伴「平将門」では、語り手が「一体将門は気の毒な人」であると述べ、「ほんとに悪むべき窺窬の心をいだいたものであらうか」と将門逆賊説への疑問を提示するところから、将門像の探求が始まる。『将門記』は冒頭部分が「端闕」となっているため、肝心の乱の発端に関する情報が不明となっている。そのため、乱の発端をめぐって主に、次のような四つの要因が従来から考えられていた（乱の原因として複数の要因を挙げているものもある）。すなわち、（一）藤原純友と共謀して乱を起こすなど、もともと窺窬の心があったというもの（『神皇正統紀』など）、（二）検非違使の佐を求めて拒否され、憤懣を抱いたことによるもの（『神皇正統紀』など）、（三）将門の父の死後、伯父国香等と領地をめぐる確執があったことによるもの（『今昔物語』など）、（四）伯父の国香や良兼等と姻戚関係にあった源護ら一族との間で女性をめぐる諍いがあったことによるもの（『将門記略』をはじめとする『将門記』抄本など）である。露伴「平将門」もまた、これらの諸説を踏まえた上で展開されており、最初に、乱の発端に関して考察されている。

語り手は、『大鏡』や『神皇正統記』などで取り上げられている藤原純友との共謀説をまず否定するのだが、その際、織田完之のように、単に『将門記』に記述がないという理由で切り捨ててはいない。将門の乱が起きた当時、漢文学の研究が流行していたという社会状況を分析し、「史記に酔はぬ限は受取れない」と共謀説を『史記』の影響を受けて出てきた言葉

ではないかと推測する。また、宮本仲笏が『扶桑略記』の記事を引いて共謀説を否定したことに同意した上で、[*8]さらに「正統記（引用者注／『神皇正統記』）の作者は皇室尊崇の忠篤の念によつて彼の著述をしたのであるから、将門如きは出来るだけ筆墨の力によつて対治して置きたい余りに、深く事実を考ふるに及ばずして書いたのであらう」と、書き手の立場や意図により操作された説ではないかと否定する。将門が検非違使の佐を求めたということに関しても、「武人としては有りさうな望」とするものの、しかし検非違使の佐は身分が高くないことを指摘し、謀叛という大事と「釣合が取れ無さ過ぎる」と否定していく。つまり、語り手は種々の史料の言葉を並べて、史料が書かれた時代状況と書き手の意図に目を向けながら、「有りさうな」事を推測していくのである。

ところで、ここで注目したいのは、共謀説を否定していく際、語り手が将門と純友とを比較している点である。語り手は、公家が栄華を誇っている反面、盗や放火が多く、武士に政権が推移する準備がされつつあったという当時の社会状況を考察した上で、「かういふ時代」に生長した将門と純友が乱を起こすのも必然性があるという。しかし、一方で、「将門は然しながら最初から乱賊叛臣の事を敢てせんとしたのではない」と純友の乱と異なり、あくまでも最初は私闘であったことを強調する。武士の台頭を表す例として同様に扱われていた純友と将門とを明確に区別し、乱の発端における私闘の要素を強調することで、将門の乱の特殊性を説いているのである。しかも、その私闘の原因として、領地をめぐる葛藤があったこともさることながら、それ以上に『将門記』抄本に書かれている「聊依二女論一。舅甥之中既相違云々[*9]」という記載を受けて、将門の妻をめぐる確執が国香や良兼等とあったことに重きを置くのである。

語り手は、将門が源護の娘を妻としようとしたが許されず恨みを抱いたという「始末」の説と、将門が迎えた妻に源護の息子たちが懸想していたという『故蹟考』の説とを比較しながら、「要するに委曲の事は徴知することが出来ない」としつつも、最終的には、自分がかつて聞いた実際の事件（旧家の孤児の後見人となって田邑を勝手に使っていた親戚が、孤児と自分の娘とを結婚させて家を我が物にしようとしたところ、孤児に反発され、遂には家も没落したという事件）を参考に、「戯曲はこゝに何程でも書き出される」、「これ（引用者注／実際の事件）を知つてゐる自分の眼からは、一齣の曲が観えて

ならない。真に夢の如き想像ではあるが」として、今までの解釈とも異なる説を打ち出す。すなわち、国香が紹介した源家の娘を将門が娶らなかったことが、国香らとの争いの因となったのだという斬新な解釈を提示するのである（「将門が源家の女を蔑視して顧みず、他より妻を迎へたとすると、面目を重んずる此時代の事として、国香も護の子等も、殊に源家の者は黙つて居られないことになる」）。もちろん語り手は、この解釈があくまでも「想像」に過ぎないと述べているのだが、しかし逆に言えば、「想像」だからこそ、『将門記』を基に語り手が作り出そうとしている将門像が明確になるといえよう。

では、「平将門」では、どのような将門像が提示されたのだろうか。

将門が初めて積極的に戦いを挑んだ理由として、語り手は将門が良兼達との戦いで妻子を殺されたことを挙げているが、妻の殺害に関して『将門記』では次のように書かれており、「文が妙に拗れて居る」のである。

妻子同共討取。即以二廿日一渡二於上総国一。爰将門妻去夫留。忿怨不レ少。其身乍レ生、其魂如レ死。雖レ不レ習二旅宿一。慷慨仮寐。豈有二何益一哉。妾恒存二真婦之心一。與レ幹明欲レ死レ夫。（略）然間。妾之舎弟等成レ謀。以二九月十日一竊令三還向二於豊田郡一。（略）件妻背二同気之中一。迯帰二於夫家一。然而将門尚與二伯父一為二宿世之讎一。彼此相捐[*10]。

ここでは、「妻子同共討取」とある一方で、「件妻背二同気之中一。迯帰二於夫家一」とも書かれており、『古蹟考』の解釈のように、妻が殺されたのか、それとも「始末」の解釈のように、殺されずに捕らわれた後、逃げ帰ったのかは明瞭ではない。また、同文中には「妻」という言葉と「妾」という言葉の両方が見られるため、殺されたのがそもそも妻なのか妾なのかも諸説わかれている。語り手は、ここでも『古蹟』と「始末」の両説をあげるのだが、最終的には「どちらにしても強くは言張り難いが」と留保を加えつつ、「しばらく妻子は殺されて、拘はれた妾は逃帰つた事と見て置く」と妻子が殺害されたという解釈をとる。そして、「落さうと思つた妻子を殺されては、涙をこぼして口惜がり、拳を握りつめて怒つたことであらう」と将門の心中を思いやり、「人間としては恩愛の情の已み難いのは無理も無いことである」と、「恩愛」にひかれて行動する将門の姿を見るのである。将門が起こす「私闘」のやむを得なさを、「これはまた暴れ出さずには居られない訳だ」「私闘の心が刻毒になつて来た」と強調するのだ。

また、この後、将門が良兼を攻める場面では、復讐心に燃えた将門の攻撃の激しさを強調するべく、『将門記』の本文を少し変更して紹介している。『将門記』では、「将門固レ陣築レ楯。且送二簡牒一。且寄二兵士一。于レ時律中二孟冬一。日臨二黄昏一。因レ茲各各挽レ楯。陣々守レ身。（略）然而各為二恨敵一不レ憚二寒温一。合戦而已。」とあり、将門の攻撃に対して良兼が全く応じなかったわけではなく、両軍とも日が暮れたため戦いをやめざる得なかったことが書かれている。しかし「平将門」では、「戦書を贈つて是非の一戦を遂げようとしたが、良兼は陣を堅くして戦は無かつたので、将門は復讐的に散々敵地を荒して帰つた」となっており、「固レ陣築レ楯」の主語も将門ではなく良兼に変えられている。この部分は『将門記』をそのまま参照したような身振りがとられているが、自らの主張、すなわち復讐心に燃える〈恩愛の情あふれる将門〉像を浮かび上がらせるために、操作されたと考えてよいだろう。

ただし、このように戦いの背後に人間同士、特に夫婦の「情」が絡んでいるということは、必ずしも将門にのみ該当することではない。「平将門」では、将門と対立する人物の行動の裏にも女性の存在を見ている。例えば良正と良兼の場合も、最初に将門を攻めるにあたって、「良正の妻は夫に対して報復の一ト合戦をすゝめたのも無理は無い」、「良兼の妻も内から牝鶏のすゝめを試みた」と妻の勧めがあったことを『将門記』から離れて自由に推測している。[*11] また、将門達に囚われていた貞盛の妻と貞盛の再会場面も「何の書にもかういふところは出て居ない」ということを明言した上で、次のような形で想像している。

戯曲はこゝにまた一場ある。貞盛の妻は放されて何様したらう。およそ情のある男女の間といふものは、不思議に離れてもまた合ふもので、（略）漢の高祖の若い時、あちこちと逃惑つて山の中などに隠れて居ても、妻の呂氏がいつでも尋ねあてた。（略）あれ程の真黒焦の焼餅やきな位だから、吾が夫のことでヒステリーのやうになると、忽ちサイコメトリー的、千里眼になつて、「吾が行へを寝ぬ夢に見る」で、ありありと分つて後追駈けたものであらうかも知れぬ。貞盛の妻もこゝでは憂き艱難しても夫にめぐり遇ひたいところだ。やうやくめぐり遇つたとするとハッとばかりに取縋る、流石の常平太も女房の肩へ手をかけてホロリとするところだ。そこで女房が敵陣の模様を語る。柔らかいしつとり

とした情合の中から、希望の火が燃え出して、扨は敵陣手薄なりとや、いで此機をはづさず討取りくれん、と勇気身に溢れて常平太貞盛が突立上る、チョン、チョ〳〵〳〵と幕が引けるところで、一寸おもしろい。が、何の書にもかういふところは出て居ない。

然し実際に貞盛は将門の兵の寡いことをば、何様して知つたか知り得たのである。

ここでは、夫に対する妻の「ヒステリー」という、語りの「現在」にも通じるような夫婦の問題を面白おかしく紹介し、いつの時代であっても共通する男女の物語が将門の乱の背後には存在していることを仄めかしている。そして、自らが想像した貞盛と妻との再会のエピソードを根拠がない「戯曲」の一場のようなものだと述べながらも、すぐ後で「然し実際に貞盛は将門の兵の寡いことをば、何様して知つたか知り得たのである」と、貞盛の妻から貞盛が将門の陣営のことを聞いたかもしれないという想像が、「有りさうな」事であり、貞盛が「知り得た」一つの可能性として、読者に印象付けていくのである。

このように、作品内では、将門の乱の裏に、将門や将門に関わる人々の男女の物語を浮上させ、こうした男女の物語の交錯の中で、〈恩愛の情あふれる将門〉がやむを得なく私闘を起こしたものであることを明らかにしようとしていた。

しかし、語り手は、将門たちの戦いが個人的な私闘であることを強調しつつも（「しかしまだ私闘である、私闘の心が刻毒になつて来たのみである」）、最終的には公に対する叛乱と捉えることができる点は否定していない。むしろ、ここでは、闘いの私性が強調されるが故に、それがいつしか公に対する叛乱として発展してしまったということが明確にされているのである。執拗な私闘性の強調は、〈恩愛の情あふれる将門〉像を浮上させると同時に、個人的な争いが叛乱へと変化する結節点が存在することをより鮮明にするのである。

3　「酒」と〈言〉

将門の行動が私闘から公に対する叛乱へと至った原因として、作品内では、興世王の甘言や宇佐八幡大菩薩の託宣及び託

宣を喜んだ群衆の言葉を将門が受け入れたことが挙げられている。これらの事柄自体は『将門記』の記述に拠るものである。特に興世王の甘言に関しては、『将門記』でも「于レ時武蔵権守興世王。竊議二於将門一云」と「議(たばか)りて云ふ」と明示されていることから、従来より将門が叛乱を起こすことになったきっかけとして取り上げられてきた。しかし八幡大菩薩の託宣に関しては、『故蹟考』が、この巫女は実は娼妓で、将門が親王を名乗ったのも酒の席の余興・茶番狂言に過ぎず、将門は決して公に叛こうとしていないと主張しているぐらいで、「平将門」以前で興世王の勧めと託宣事件とを結びつけて語っているものは多くはない。だが「平将門」では、両者の言葉を受け入れた将門が同じく「酒に酔つた」と評され、この二つの事件が重視されているのである。

まず興世王が将門のところへ逗留し、二人が親交を深めていく場面に関して、語り手は「二人で地酒を大酒盃かなんかで飲んで」暮していたと喩えている。もちろん、これは『将門記』にない記述である。ここで思い出したいのは、作品の冒頭で挙げられていた「酒」と「書」すなわち〈言〉をめぐる発言である。先述した通り、作品の冒頭では、「酒」と〈言〉(「書」)は魅力的ではあるが、ついつい人は飲まれてしまい、後悔を催す元となるものとして捉えられていた。将門はこの「酒」のような〈言〉にまさに「飲まれた」人なのであり、言葉を上手く使いこなせずに滅びていった人なのである。

語り手が最初に「乱賊」の行為と意味づけた、藤原玄明をかばって行った常陸国府襲撃に関して、『将門記』では「将門素済二佗人一而述レ気。顧二无便者一而託レ力」という性質から「乃有下可レ被二合力一之様上」と将門が玄明の頼みを積極的に承諾したと記している。それに対して、作品内では、将門の「親分気のある」性質を認めつつも、「余り香ばしくは無い」と思いながら「仕方が無い」と引き受けたと捉えており、玄明を助けた背後に興世王の言葉があったことを想像している(「面白づくに、親分、縋つて来る者を突出す訳にはいかねえぢや有りませんか位の事を云つたらう」)。つまり、興世王との「酒」、すなわち興世王との言葉のやりとりの後、将門が玄明をかばい「乱賊」の所業に手をそめ、さらには興世王の「一国を取るも罪は赦さるべくも無い、同じくば阪東を併せて取つて、世の気色を見んには如かじ」という言葉を合点し、「此の居候のお蔭で将門は段々罪を大きくした」というストーリーを語り手は展開していくのである。そして、このような将門の

姿を語り手は「もういけない。将門は毒酒に酔つた」と解説する。

次に八幡大菩薩の託宣に関しても、「群衆」が無茶に歓び「将門は親皇と祭り上げられ」将門もそれを受け入れたことから「将門は毒酒を甘しとしてその第二盃を仰いでしまつた」とする。しかも、「此の仕掛花火は誰が製造したか知らぬが、蓋し興世玄明の輩だらう」と、群衆の狂乱の蔭に、興世王達の煽動があることを推測しているのである。

このように、この作品では、従来の逆賊・将門とも、悲劇の英雄・将門とも、また武士の台頭を表す一例としての将門とも異なり、恩愛にひかれてやむを得ず私闘を続けていくうちに、ふとしたことから周囲の〈言〉に飲まれて「乱賊」となった、「気の毒な」将門像を提示していた。もちろん、このような将門像は、大岡昇平が「力はあるが、少し脳味噌の足りない馬鹿者」と痛烈に評した「ヒューマニズム的将門像」（「将門記」『展望』昭40・1）に過ぎず、将門の再評価に繋がるようなものではない。しかし露伴が「平将門」で試みようとしたのは、おそらく将門の再評価などというものではなかっただろう。藤原忠平に宛てた将門の弁明書（将門書状）を全文引用して説明している箇所でも、語り手は「此書の末の方には憤怨恨悱と自暴の気味」があり、「少し無理があり、信じ難い情状」があると指摘し、将門が言葉を上手く使いこなせていないことを示唆するのだが、しかしそれ故、かえって「愛す可き」存在であることを強調していた。ここで試みられていたのは、むしろ大岡がいうところの「ヒューマニズム的将門像」を提示することで、そのような将門に「乱賊」の道を進ませる契機となった、「酒」のような〈言〉の魔力（危うさ）こそを前景化させることだったのである。

4　〈言〉をめぐる物語

此時、此等の大変に感じて精神異常を起したものか、それとも玄明等若しくは何人かの使嗾に出でたか知らぬが、一伎あらはれ出でゝ、神がゝりの状になり、八幡大菩薩の使者と口走り、多勢の中で揚言して、八幡大菩薩、位を蔭子将門に授く、左大臣正二位菅原道真朝臣之を奉ず、と云つた。（略）理屈は兎もあれ景気の好い面白い花火が揚れば群衆は喝采するものである。群衆心理なぞと近頃しかつめらしく言ふが、人は時の拍子にかゝると途方も無いことを共感協行

するものである。（略）群衆心理は即ち衆愚心理なのであるから、皆自から主たる能はざるほどの者共が、相率ゐて下らぬ事を信じたり、下らぬ事を怒つたり悲しんだり喜んだり、下らぬ行動を敢てしたりしても何も異とするには足らない。（略）群衆は感の一致から妄従妄動するもので、（略）そこで衆愚心理を見破つて、これを正しく用ゐるのが良い政治家や軍人で、これを吾が都合上に用ゐるのが奸雄や煽動家である。八幡大菩薩の御託宣は群衆を動かした。群衆は無茶に歓んだ。将門は新皇と祭り上げられた。通り魔の所為だ、天狗の所為だ。衆愚心理は巨浪を猨島に持上げてしまつた。将門は毒酒を甘しとして其の第二盃を仰いでしまつた。

引用は、八幡大菩薩の託宣を将門が受けた時の場面である。ここで「群衆心理」「群衆（集）」という言葉がたびたび使用されていることは見過ごせない。語り手は「群衆心理なぞと近頃しかつめらしく言ふが」と、託宣騒ぎに見られる発狂状態が、語りの「現在」でこそ話題となっていることに自覚的なのである。言い換えれば、将門を「乱賊」へと向かわせた、「群衆心理」に基因した「酒」のような魔力を持つ〈言〉は、語りの「現在」においてもその力を失っていないのである。

「平将門」が発表された大正九年前後は、「現代は群衆の世である。少くとも近代に於ける社会的現象は、群衆心理に依つて支配せらるゝ所が甚だ多い」（樋口秀雄『群衆論』大2・9・20、中央書院）といわれるようになっていた。特に第一次世界大戦後の不景気から各地で米騒動などの暴動が多発し連日報道される中で、集団の力の脅威が語られていたのである。[*12] 例えば、菊池寛の小説「群衆」（『雄弁』大6・12、『心の王国』大8・9・10、新潮社）は、ロシア革命に附髄した挿話で、群衆が義憤にかられて、無実の青年を興奮して撲り殺すという話である。この小説の末尾では、「茲に集つて居る群衆も決して悪い群衆ではない。不正に対し義憤を感じ、其犠牲に涙を注ぐ人達である。が夫等の人達によつて、耿々たる正義の言葉を吐いた勇ましい青年が、何うして豚のやうに殺され又は殺されかゝつたか。人は独りで居る時最も賢い。群衆すればするほど、本当の理智を失つてしまふのだ。」という文章が付されており、「群衆」がともすれば理智を失うことに警鐘を鳴らしていた。そして、このような「群衆」を正しく導くこと、具体的には例えば公民教育の普及徹底（大山郁夫「米騒動の社会的及び政治的考察」『中央公論』大7・9）や、「人格的覚醒」を促すこと（「補教と普選（巻頭言）」『改造』大8・

11）が指導者・知識人達に求められ、逆に煽動者の警戒が呼びかけられていたのである。ただし、集団の力は、否定的にばかり捉えられていたわけではない。大戦後の世界における社会的変動は、「今や全世界を挙げて、改造の機運にある」（権田保之助「民衆の文化か、民衆の為めの文化か――文化主義の一考察――」『大観』大9・6）と叫ばれ知識階級の欺瞞が指摘される一方で、新しき時代の代表として「民衆」[*13]のエネルギーが渇望されてもいた。

作品内でも語り手は集団の力、それ自体を否定しているわけではない。「民庶は何様な新政が頭上に輝くかと思つたために、将門の方が勝つて見たら何様だらうぐらゐに心を持つてゐたのであらう」とあるように、語り手は「民庶」という当時の文献に登場する言葉を使って[*14]、民の思惑も見ている。彼らは単に意志を持たず流されたのではなく、将門の叛乱に期待し蔭から支えようとしていただろうことを推測しているのである。「平将門」の語り手は、八幡大菩薩託宣事件の裏に、興世王のような煽動者がいた可能性を指摘しつつ群衆心理の愚かさを語る一方で、したたかに世の中の動きを見つめる「民庶」の姿も指摘しているのである。語り手は、集団の力それ自体を否定するというよりも、むしろ、混乱の中で発話者も発話者の意図も不明瞭なまま、しかし大きな力を持っていつの間にか影響力を発していく〈言〉というものの脅威と、〈言〉に「飲まれる」ことへの危険性を語っていたといえるだろう。

この時期、「デモクラシー」や「民主主義」という語は「所謂民主主義（政治的）は五箇条御誓文に依て公認された我日本帝国の国是である」（中田薫「デモクラシーと我歴史」『中央公論』大8・5）といわれたり、釈迦の「衆生一切悉有仏性」に見ることができる（醍醐恵端「デモクラシーの先祖御釈迦様」『改造』大8・6）とされたりするなど、都合よく解釈され、その中身は多様で、きちんと内実が問われないまま流行語となっていた。有島武郎は、「デモクラシー」や「民主主義」という語を「モットーの如く」にいいふらす「猫の眼のやうに迅速な気の利いた変化をたゞ時世の加減とばかりは思つてゐられない不安を感ずるものだ」（「自分に云ひ聞かせる言葉」（『改造』大9・3）と述べているが、露伴もまたそうしたデモクラシー熱からは距離を置こうとしていた。

実に何うもデモクラシーの勢ひは驚く可きものですね。少し勢ひが好過ぎるやうぢやありませんか。私も昨年頃は人

よりも社会主義的な言説を用ひましたが、近頃は少しく反感を持つて来ましたね。勿論昨年頃のは私の考で今のは単に感じですから、その感じで自分の考を覆へす愚はしませんが、さればと言つて大いにデモクラシーを主張する気にもなれません。まア黙つて見てゐるのです……。（幸田露伴「時局縦横談」『読売新聞』大8・11・22）

「平将門」の語り手は、〈言〉が鵜呑みにはできないものであることを念頭に、将門に関する「書」の言葉に向き合いながら、言葉の背後にある書き手の思想や書かれた時代状況を一つ一つ類推し、自分なりの将門像を語ろうとしていた。このような作業こそが、実質的な中身を伴わないまま、どこからともなく標語のように言葉が飛び交う時代にあって、〈言〉に安易に飲まれないための有効な方法であることをこの作品は示唆しているといえないだろうか。

おわりに

作品内では、「書」の言葉、興世王とのやりとりに見られる言葉、そして、群衆の中から湧き出てくる言葉（起源も意図も不明瞭なまま湧き起こる言葉）が同じく「酒」という比喩で表されている。これらは、本来、それぞれ性質の異なる言葉であることはいうまでもない。しかし、人を「飲む」という点では、どの言葉も一様に大きな力を持つものとして、語り手はそれぞれの言葉に区別をつけることはしない。発せられた言葉の背後に潜む話者もしくは書き手の状況や意図によって変わってくるもので、何を信頼するかは自分で判断していくしかない、という点では三者は変わらないのである。それが、たとえどのような権威ある「書」に書かれた言葉であってもである。

語り手は史料に直接記述はないが、自らが史料を読んで想像した事を語る時には、「こゝにも戯曲的光景がいろ〳〵に描き出さるゝ余地がある」や「戯曲はこゝにまた一場ある」など、「戯曲」という言葉を使って、史料に書かれた「歴史」とは区別していた。しかし語り手は「何様も戯曲には真の歴史は無いが、歴史には却つて好い戯曲がある」と、「歴史」の言葉が「戯曲」に接近する様も語り、さらには「歴史が書いてゐるのは確実で無い」と「歴史」への疑いも吐露している。また、先に確認した通り、貞盛と妻の再会場面で、語り手による「戯曲」的な想像が、あり得た可能性の一つとして仄めかさ

れていたことを考えると、語り手は「戯曲」も「歴史」も同じ地平で捉えようとしていたことがわかるだろう。両者とも同じく、人を酔わす「酒」のような〈言〉となる（なり得る）のである。

大正期の史学界では、大学のアカデミズム史学の考証第一主義にあきたらなくなって、そこから解放をもとめる傾向が強まり[*15]「これまでの日本史学にはなかった新しい視角・方法が着実に芽生えつつあった」[*16]。例えば「是迄の歴史が、普通政治的に縦断して居る傾があるに反して、社会的に横断して見やうとした」（『国史上の社会問題』大9・12・15、大鐙閣）という三浦周行の「社会史」や、「乾燥無味」で「生命」のない専門家が書く「歴史」とは異なり、「歴史らしき歴史たらぬ」「文学らしき歴史」「美術らしき歴史」と評された[*17]西村真次『新国史観努力の跡』（大5・6・25、冨山房）などは、その一例といえるだろう。また太田善男「歴史の贋造（上・下）」（『読売新聞』大7・7・17、18）では、「歴史の議論は皆謂ゆる蓋然的推理である」として、「プロバビリチー」の「歴史」（「蓋然的真理」）が追求されるなど、様々な形で「歴史」に迫ろうとする動きがあった。このような中、露伴は「平将門」で、考証第一主義的史学から離れて他の史伝物と同様に「イフの歴史」（川西前掲論文）を読者に見せようとしただけではなく、〈言〉との関わりの中で「歴史」を捉え返そうと試みたのである。

とはいえ、〈言〉が危ういものである以上、「平将門」という「書」も、語り手の言葉もまた、人を酔わせる「酒」となり得る。「書かずともと思つてゐるほどだから、読まずともとも思つてゐる」「飲むも飲まぬも読むも読まぬも、人々の勝手」と冒頭で述べ、末尾でも「こんな事は余談だ、余り言はずとも『春は紺より水浅黄よし』だ」と放言する語り手は、自らの〈言〉も決して例外ではないことに充分自覚的なのである。もちろん、だからといって語り手は語ることをやめようとはしない。語り手は、むしろ〈言〉の魔力を楽しみながら、種々の「書」の言葉と対峙し、時には軽妙な「警句」を挟んで、あえて〈言〉と徹底的に戯れ続けるのである。「平将門」という作品は、言葉とどう向き合うかということを問い直した、まさに〈言〉をめぐる物語なのである。

註

＊1　歴史雑誌『中央史壇』「平将門号」（大9・12）の「巻頭言」では、「事蹟より心理を曲解するの非なるが如く、心理より事物を妄断するも亦非なり」という、明らかに露伴「平将門」内の言葉（「心理から事跡を曲解するのは不都合であるが、事跡から心理を即断するのも不都合である」）を下地とした発言がある他、この作品が同誌同号で取り上げられたり（「従来史家の称へ来つた所に慊らなかつた予の所信と合致する」水郷楼主人「幸田博士『平将門』論妄批」）、歴史学者大森金五郎に批評されたりしている（「人情味を以て見た『蒲生氏郷、平将門』」『東京朝日新聞』大15・1・31）。また、梶原正昭訳注『将門記　全二巻』（昭50・11、51・7、平凡社）では、しばしば露伴「平将門」における『将門記』の解釈が紹介されている。

＊2　例えば露伴の史伝物に見られる手法に関して、出口智之は「史実や単一の物語世界にとらわれることのない、さらなる広がりを持った作品空間を生み出した」（「露伴史伝の出発――『頼朝』論――」『幸田露伴の文学空間』平24・9・15、青簡舎）と評し、また川西元は、「史料とそれへの読解作用の間を自由に往還する場で、いわば〈読む〉ことがそのまま〈書く〉ことであるような立ち現れ方」をした「評釈的な方法」（「幸田露伴『蒲生氏郷』論」『国文論叢』平10・3）と捉えている。

＊3　鈴木雄史「『将門』と『天皇様』を語る『文字』――幸田露伴『平将門』という『酒』――」（『伝承文学論〈ジャンルをこえて〉――東京都立大学大学院国文学専攻中世文学ゼミ報告』平4・3）は、「平将門」を中心に論じた数少ない論稿であるが、この作品を天皇制イデオロギーと親近性のある論法で将門弁護をしたものと捉え、そこに日本語に固有の「（非）論理」を見ており、本稿の論旨とは大きく異なる。

＊4　幸田露伴『日本史伝文選（上）』（大8・6・30、大鐙閣）収録の『将門記』抜粋（将門書状「上太政大臣藤原忠平書」）も露伴「平将門」での引用と異なる部分があるため、露伴がそれぞれ読み易さを考え校訂したと思われる。ただし、いずれも『群書類従』所収のものと細かい表現が異なるだけで、内容に大きな違いはない。

＊5　明治四四年から大正九年まで使用された『尋常小学日本歴史（巻一）』では、「中には朝威を軽んじて謀叛するものさへあらはれたり。紀元一千五百年代の末頃より一千六百年代の初頃にかけ、平将門は東国に、藤原純友は西国に、同時に乱を起したるが如きは其の著しきものなりとす」『日本教科書大系　近代編（第一九巻）』、昭38・3・30、講談社）とある。なお、将門像の変遷に関する研究としては梶原正昭・矢代和夫『将門伝説』（昭50・12・30、新読書社）、佐伯有清他著『研究史　将門の乱』（昭51・9・10、吉川弘文館）、村上春樹『平将門――調査と研究――』平19・5・31、汲古書院）、岩井市史編さん委員会編『（新装版）

平将門資料集』（平14・4・30、新人物往来社）などがあり、参考とした。

＊6 例えば星野恒「将門記考」（『史学会雑誌』明23・1）や田口鼎軒「平将門」（『史海』明26・8）、三浦周行『歴史と人物』（大5・4・19、東亜堂書房）など。

＊7 「敢て将門を忠臣といふ、勤王家といふ、革命の先鞭をつけ、為めに犠牲となりし義士なりと云ふ」（内山正居「平将門」『史学界』明33・2～5）

＊8 宮本仲笏の説は、「始末」の頭注にあげられている。露伴はおそらくこの部分は「始末」を参照して書いたのだろう。

＊9 『群書類従』内の「将門記」の末尾に「右将門記。以二植松有信所レ刻本一書写。以二抄本及扶桑略記。古事談等一一校了。」と掲げられている。

＊10 傍線引用者。以下同。

＊11 『将門記』では、良正に関しては「爰良正偏就二外縁愁一」とのみあり、妻の記述はない。また良兼に関してもこの時、妻が関与したという記述は一切ない。

＊12 例えば「軍隊と群衆と／大阪は遂に流血／群衆は空砲の下を潜つて竹槍を揮ふ深夜の惨事」（『読売新聞』大7・8・14）では、「米、米、米、この食料の騒擾は警官の力を以てするも、更に軍隊の力を以てするも、鎮静すべき形勢なし、いよ〳〵拡大して、民衆は到る処に必死の叫びを挙ぐ」と報道されている。

＊13 島村輝は「群衆」とは「なんらかの非日常的な環境の下で、なんらかの志向や関心を共有している多数の人間の集合」であり、それに対して「民衆」とは「それほどはっきりした輪郭をもたない概念」であり、その時々で「群衆」「大衆」「公衆」と同様に使われる「都合のいい言葉であった」と指摘している（「群衆・民衆・大衆」『編成されるナショナリズム（岩波講座　近代日本の文化史5）』平14・3・22、岩波書店）。

＊14 例えば「平将門」でも名前が挙げられている『日本紀略』の延喜十七年七月の記事には「炎旱連月。民庶飢渇。群盗満二干巷一。」とある。

＊15 大久保利謙『日本近代史学の成立（大久保利謙歴史著作集7）』（昭63・10・10、吉川弘文館）。

＊16 永原慶二『歴史学叙説　20世紀日本の歴史学（永原慶二著作選集第九巻）』（平成20・3・10、吉川弘文館）。永原はこの時期、ちょうど吉田東伍、津田左右吉、柳田国男、伊波普猷らが活躍しだすことを挙げ、「官学アカデミズム歴史学が維新期以来ほとんど目を向けることのなかった、民衆的・在地的世界あるいは生活史的分野へのまなざし」が獲得され始めたことを指摘してい

る。

＊17　黒板勝美「序文」（『新国史観努力の跡』大5・6・25、冨山房）

〔※付記〕本稿は日本近代文学会関西支部春季大会（於龍谷大学、平23・6・11）で報告した口頭発表「幸田露伴『平将門』論――『言』をめぐる物語――」を原形に、新たに考察を加えたものである。発表内外で貴重なご助言を頂いた。また資料の閲覧に際し、慶應義塾大学三田メディアセンター及び国立国会図書館に便宜をはかって頂いた。心から感謝申し上げます。

本文の引用は『露伴全集（第一六巻）』（昭53・12・18、岩波書店）に拠る。引用に際し旧字は新字に改め、振り仮名・傍点等は適宜省略した。